

## 日菅上人佐野前励

大宰府政庁跡の正殿付近から200メートルちよつと北上した高地に、體精山日菅寺があります。建立は大正4年（1915年）。日蓮宗僧侶・佐野前励の生前の功績を称え、彼の遺志を継承するために建てられました。

佐野前励は安政6年（1859年）2月18日、下河善兵衛の長男として美濃国大垣（現在の岐阜県大垣市）に生まれます。名は善之進。前励の生涯は原田種夫『佐野前励上人』に詳しく記されていますが、それによると父の善兵衛は犬山藩家老職にあつたということでした。前励は3歳の時に生母を亡くし、間もなく迎えられた父の後妻とはうまくいかず、明治3年（1870年）、12歳で江戸詰めを慕って一人家を出ます。この江戸への道中、身延山へ参り日蓮宗と出会いました。翌年2月18日、父の住居の近くにあつた日蓮宗正法寺の住職・佐野日遊の養嗣子となり得度受戒、僧侶の道に進みます。

前励が太宰府と縁をもつ契機は、明治21年（1888年）30歳の時に企てた宗門改革にあります。前励は志を同じくする青年僧侶本間海解と共鳴し、当時いくつもの本山が分立していた日蓮宗の統一を目指し、改革に乗り出します。ところが諸本山側と対立、改革派は敗れ、前励は福岡県の西身延本仏寺（うきは市）にとばされてしまいます。九州に下つてからも前励は宗門内の政治力掌握のため活

## 太宰府人物志

資料室だより ③

発に画策します。当時福岡で持ち上がった元寇記念碑建設計画にも積極的に関わり、日蓮の大銅像建設に着手（明治37年、福岡市東公園内に完成）、しかし前励の活動は宗門内上層部の忌諱にふれ、ついに僧階剥奪、この頃銅像建設運動も一旦頓挫、失意のうちに都府楼（現在の太宰府政庁跡）に至り、そこに體精庵という草庵を建てて起死回生を待ちます。この時、菅原道真に自分の境遇を重ねて日号を日菅とあらため、銅像建設成就のため太宰府天満宮に日参したということでした。

半年後に許されて本仏寺に戻り、前励はその後、日蓮大銅像の建設運動をはじめ、数々の事業に奔走します。原田種夫は彼のことを「直情径行、百折不撓の強烈な精神で、理想の実現に向つて直線的に行動した人」と表現しています。太宰府での前励の功績は、明治43年（1910年）、福岡で開催された九州沖繩八県連合共進会に呼応した地域振興事業に見出すことができます。前励の運動により、政庁跡には天智天皇の像を祀った「天智殿」が完成しました。天智殿は当時の写真で確認するかぎり、大正末から昭和の初めごろまで正殿付近にあつたと思われまふ。このおよそ2年半後の大正元年（1912年）9月7日、前励は54歳でその生涯を閉じます。